
スカイと仲間たち ～大空と謳われる者～

鬼狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スカイと仲間たち　　く大空と謳われる者く

【Nコード】

N1632L

【作者名】

鬼狐

【あらすじ】

とある丘に、バシヤーモのスカイという者がいた。

ある日、突然現れたミュウに、スカイがあるマフィアの十代目ボスだと

告げられた。だが、それが物語の始まりにすぎなかった！

第一話 日常

ここは、ポケモンだけが住む世界。

その世界にある多数の島々の最東端にある島、

「コロレ島」という。

コロネ島の最も東側にある丘にある家に
住んでいるのは、バシャーモだった。

このバシャーモは、父が数年に一回しか帰ってこなくて
母は、行方不明でそのために一人で生活している。

「よし、部屋の掃除も終わったしなちよつと修行でもしてこようかな」

彼の日課は、主に家事全般と体を鍛える事だった。

「でも、もう12時か。修行する前に昼食にしようかな。」

彼は、そう言って台所に向かった。

でも、ずっと彼は一人というわけではない。

ばんっ！ バキッ！

「おはようスカイ！」

「おはよう、チエル。つてもう昼だよ!？」

それにまたドア壊してるし!これで96回目だよ!」

スカイって言うのはここに住んでいるバシャーモで、

いきなり家に入ってきた彼女は、エンペルトのチエルという。
さつきチエルが、おもいきりドアを開けたせいでドアが壊れてしまった。

「私って96回もドア壊したっけ？」

「ポツチャマの時に42回壊して、ポツタイシの時に33回壊してエンペルトの時は、今回含めて21回だぞ。」

スカイは、ドアを直しながら言った。

「っていうか、どうしてあんたそんなに覚えてんの？」

「チエルがよく壊すから、数えてたんだよ。よし、これでいいかな。」

ちょうど、ドアが直った。

「で、何でチエルがここにきたの？」

「幼馴染として、あんたの手伝いをするためよ。
今の時間だと、昼食をつくる時間だなんて思ってたね」

「でも、手伝いのために来たならドアを壊さなくてもいいのに」

「うっ…！ 気にしたら負けよ☆」

「☆いらなくない？」

チエルの痛いところかれた。

「ま、まあとりあえず昼食作ってないんでしょ?」

「うん、一応そうだけど」

「じゃあ手伝う!」

「却下」

スカイが即答で答えた。

「SOKUTOU?何それ?おいしいの?」

「チエルが手伝うとろくなことになる」

「気にしたら負けー☆」

こんな生活が、スカイの日常だった

第一話 日常（後書き）

ども、作者です。

スカイ「スカイです。宜しく」

チエル「チエルだよ。よろしく」

スカイ「というわけで編集しました。」

チエル「以上」

第二話 物語の始まり

〽翌日〽

「ふぁゝ、よく寝た。」

スカイは、あくびをしながらベッドから起きた。
そして、ベッドの近くに置いてあるペンダントを取った。

「おはよう、母さん。」

そのペンダントは、大きなオレンジ色の結晶が埋め込まれているペンダントで、
スカイのお母さんが、行方不明になる前にもらった母からの形見だった。

スカイは、ペンダントを首に下げて朝食を作るために、台所に向かった。

そして数分後、朝食が完成した。
早ッ！というツツコミはスルーで…。

チエルは、朝起きるのが苦手なため朝食の時は来ない。

スカイは、朝食を食べ終えて食器を洗った。
早ッ！というツツコミは（ry

「ふゝ、食器洗いも終わったし次は、洗濯物でも干そうかな。」

そう言って、洗濯物と一緒に外に出た。

五分後

「洗濯物、終了さ」と暇つぶしにモ○ハン○rdでもしようかな」

「ウカム○バスって全然でないな」と言いながら家に向かおうとした

その瞬間、

ピタッ

何かが自分の左肩を触ったような気がした。

何故こんな明るいときに幽霊が!?
いや、まてよ幽霊とは限らない……。
だけど……

とか思いながら、恐る恐る後ろを振り向くと……

誰もいなかった。

「やっぱり気のせいだったんだったんだ。よかったあ」

と安心して前を見ると……

「ギャアアアアアアアアアアアア！！」

「最高のリアクションありがとうございました。」

スカイの叫びに耳を両手で抑えてそういったのは、
小さくピンク色の体、それに長い尻尾のそのポケモンは、
ミュウだった。

「ちょ！誰！？いきなり前見たら逆さまのミュウが浮いているんだから」

「でも僕、最初から浮いてるんだけど……」

ジュンが驚いた理由は、
前を向いた瞬間、いきなり目の前に逆さまのミュウが、
スカイの顔から約3センチぐらいの距離でいたからだった。

実はスカイは幽霊とかが、大嫌いだった（笑）

「で、俺に何か？てゆうか、（笑）付けないで！？」

「あ、そうだったそうだった。じゃあ、ここで話すのもなんだから家に入ろう」

「って俺の家だから！！」

ミュウのボケに突っ込んだスカイでした。

（スカイの家の中）

「で、何のよう？」

「じゃあ、単刀直入に言うよ。

君には、あるマフィアの十代目ボスになってもらうよ☆」

「……………」

「どったの？」

「俺が、マフィアの十代目ボスうううううううううう！！！」

「また最高のリアクションありがとうございます」

第二話 物語の始まり（後書き）

スカイ「いきなりあんなこと言われてもな」

ミュウ「だから、単刀直入で言うって言ったじゃん」

チエル「私の出番は」

ごめんごめん。本当はもっと書きたかったけど
用事ができてしまってね。

チエル「次回は、私の出番はあるの？」

うん。

チエルファンの方、誠にすいませんでした。（土下座）

第三話 ラルクの話（前書き）

今回ちょっといつもより長いです。

第三話 ラルクの話

「俺が、マフィアの十代目ボスうううううううう！！」

いきなり現れたミュウに、マフィアの十代目ボスなんて言われるなんて。

「君って叫ぶの好きなの？」

スカイの叫びにミュウは耳を抑えた。

「そんなわけないだろ！」

「って言っても君はまだ“ピースファミリー”の十代目候補だからね」

「ピースファミリー？てかそんな事より俺は別にマフィアと関わったことなんて一度も無いぞ」

俺の記憶には、マフィアと出会った記憶と関わった記憶がないし。

「関わったことならあるよ君は☆」

「は？てゆーか、☆付けすぎ」

このミュウの言ってることが全然理解できないんですけど。

「まず君は、ボスの“証”を九代目からちゃんともらってるしね」

「は？」

スカイは意味がわからず「は？」しか言葉が出せない状態。

こいつの言ってることがますますわかんね〜
って言うかそんな証もらってね〜ぞ。

「いゝや、君はちゃんと“証”をもらってるよ」

「!!」

「ちょっと君の心を読ませてもらったよ〜」

「勝手に俺の心を読むな！」

「あと、僕の名前はラルクって言うんだよ。

九代目から君にこのことを伝えるためにここに來たんだ。」

「ってスルーかよ！それに微妙なところで自己紹介してるし！」

「ほら、君の首に下げてるでしょ。」

首？それってまさか……

「そう。そのペンダントだよ。そのペンダントはボスの証だから」

「こ、これは母さんから貰ったものだぞ。ボスの証とかじゃn」

「だから、君は九代目から直接もらったでしょ？」

…はい？ どういう事？

ん？ていうことは……

.....

「どうしたの？　また固まって。」

「ていうことは……」

[illegible]

「ちよつと、大声出しすぎだと思うよ。耳の鼓膜が破れそうなんだけど」

本日三回目の叫びだった。

「あ、ごめん」

「まあ、驚くのはあたりまえかな。それに、君にはもう一つの“証”を
引き継いでいる」

「もう一つの“証”？」

「そ♪それはねえ。
“血”だよ」

「血……？」

「そう。君は、九代目である君のお母さんの血と初代ボスの血を引

いているんだ。」

そ、そうなんだ……。でも、

「で、でも何で俺なんだよ。俺意外でも十代目候補はいるんだろ？」

「それが、君しか無理なんだ」

「？」

俺だけにしか無理？ どうゆうこと？

「君以外の十代目候補は、全員心臓麻痺で死んだんだよ」

「なんでデ○ノートみたいなの！？」

「さあ、知らない」

もうメチャクチャだ……。

「でね、君にはファミリーを集めてもらうよ」

「それはどういう意味？」

「ピースファミリーには、ある違う世界のファミリーの……えっと、なんて名前だったけ？ 貝の名前だったような……。うーん、思い出せない

…けどいいや♪」

いいの！？ってゆーか、

「違う世界ってなんだよ！？」

「あー、それね。教えてしんぜよう」

何だか、偉そうだなあ

「違う世界っていうのは、簡単にいえば“異世界”かな？」

異世界……なるほど。

……って！

「異世界なんて本当にあるの？」

「あるに決まってるよ」

決まってるんだ(汗)

「ま、異世界って言っても、人間あり魔法あり魔獣ありドラゴンありの世界出身だったんだ初代ボスは。でも、ポケモンはいなかったな」

本当に異世界だ……

ってあれ？ポケモンがない？

「ってことは、初代ボスは、ポケモンじゃないの？」

「うん。そだよ。人間だよ」

って事は、俺は、人間の血を引き継いでいるということだ。

「まあ、大体の事は省くけど、いいよね？ 答えは聞いてない♪」

「どこのガンフォームだよ」

「まあ、初代ボスは、その世界から違う世界にとぶことができたんだ。

簡単に言うと、違う世界に行くことができたんだ」

なるほど…だから、その初代ボスは这个世界に来ることができたんだ。

「で、その彼がココとは違う世界のさっきの貝ファミリー（仮）の初代ボスと知り合って、なんやかんやで、このピースファミリーをつくり、

そして、“守護者”を作った。」

守護者？

「そう。守護者ってのはね。ボスを守護する六名のことだよ。で、ボス意外の六名のメンバーの特徴が天候になぞらえられてるんだよ」

「で、それが？」

「君が十代目ボスとして自分のファミリーを探してきてほしいんだ」

「つまり、その俺意外の六名を探すってこと？」

「うん。そういうこと。やっぱりあったまいね君」

「そりゃあどうも」

「で、話の続きね。」

ピースファミリー全体を一つの世界に例えて、

ボスは、世界の全てを包み込み、全てを守る“大空”と謳われ

その部下たちは、

身内同士の戦いを沈める“雨”

怒涛の攻撃で敵を倒す“嵐”

どんな敵も瞬速で倒す“雷”

ファミリーの真実をつかませない“霧”

明るく照らし欠かせない存在“晴”

その力で大空を隠しボスを存在を隠す“雲”

と言うように例えられてるんだよ。」

「ふん」

「あまり理解してないね」

スカイは、こくこくと頷いた。

その行動に呆れてため息を漏らしたラルクだった。

「あ、そうそうもうすぐここにね

雨と守護者が来るよ。」

「そんなことより雨って？」

その瞬間、

ばんッ！バキッ！

と扉をおもいつきり開けて壊した者とは

「チエルが来たってことは…まさか！」

そこに来たのはチエルだった。

「スカイ。 “彼” 来てない？」

「“彼”？ ってまた扉壊したし。 これで97回目だぞ。」

「あ、ごめん」

「で、 “彼” って言うのは？」

「えーと、彼って言うのはミュウなんだけど

スカイの家に来たらこのペンダントのこと教えてあげるって
いって消えたから急いで来たの。」

と言いチエルはペンダントを取り出した。

「!! そのペンダントって!」

「うん。スカイが持つてるペンダントそっくりでしょ」

チエルが持っているペンダントは母さんからもらったペンダントと同じ形だったけど結晶の色が青色で結晶の中には水の雫のマークが描かれていた。

「ミュウってもしかして……」

スカイはラルクの方へと振り返った。

そして、そのラルクは何故か落ち込んでいた。

「あ! いたいた!」

とラルクの方を指をさしながら叫んだ。

「えっと…チエルちゃん…今なんて言った?」

落ち込んでる理由はわからなかったけどそのせいで声のとぎれとぎれになっている。

「え? いたいたって」

「いや……一番最初の辺り」

「彼来てない? って」

その言葉言った瞬間、ラルクはフラフラと崩れていった。

「ちよ！ラルク大丈夫！？」

「アハハハハハ」

ラルクもしかして何かで壊れたのか？

「二人とも……一応言っておくよ……」

「へ？……ええええええええええええええええええ！！」

「WAO! まさかだね☆」

ラルクって女——！！

「え!？　なんで？　ミュウって確か性別ないんじゃない？」

「君は、ゲームみたいに本当に性別がないと思っているのかい!？」

「いや別に、そこまでは…」

「私てつきり、雌雄同体だと思ってた♪」

うわあ、チエル……流石にそれは……

「あれ？なんでだろう目から汗が……」

チエルちゃん、ごめん。スカイ君から聞いて……」

と言った瞬間ラルクはテレポートでどこかに行ってしまった。

「あれ、私ひどいこと言ったかな？」

チエル自覚なし。

「お前、今日天罰くらうぞ？ まあ、扉の修理しながら説明するよ」

「おk」

俺は扉を直しながらチエルに説明した。

第三話 ラルクの話（後書き）

スカイ「大空に嵐に雨に雷に晴に霧に雲
ってもうり○○ンじゃんかこれ！」

気にすんな！

第四話 旅、開始！（前書き）

今回、ちよつと長いかね。

ドサイドンはため息を吐きながらそう言う
と部屋を一つ一つ探していった。

とその時一つの部屋の方から泣き声が聞こえた。

「ん？誰かの泣き声か？」

ドサイドンは、その泣き声が聞こえる部屋の扉に
耳をあて、よく聞いてみるとやっぱり泣き声だった。

「ま…まさか！」

ばんっ！

そう言うと同時にドサイドンは、チエルと同じぐらいの力で扉を開
けた。

が扉はそれほどの力で開けられても壊れなかった。

「ボス！ここにいるのですか？」

ドサイドンは、辺りを見渡した。

そしたら、部屋の隅で体育座りをして泣いているミュウ…
ラルクを見つけた。

「ボス。また間違えられたんですか？」

「うう…ログですか？」

「イエス。」

まあ、俺も、最初は、雌雄同…おおっと、なんでもない。

「ぐす…今は僕一人にしておいてください…」

「はいはい。わかりましたよボス。」

ログと言われたドサイドンは呆れた顔で
そう言うのと、その部屋を後にした。

～スカイの家～

スカイとチエルはソファに座っていた。説明している間に扉が治ったからである。

「…というわけ。わかった？」

「ok。でも…」

「でも？」

「スカイが、ボスって……プツ、キャハハハハハ」

「おい！笑いことないだろ！」

「めんごめんご♪でも…キャハハハハハ」

ドシンッ

「大丈夫なのか？」

「う、うん」

チエルが大笑いしてソファの上から落ちた。

「笑いすぎだぞ」

「わかった。で、どうするの？ スカイは」

「何が？」

「だ・か・ら、スカイはボスになるのかな〜って」

「う〜ん、なる予定かな。」

「……………」

スカイがそう言うと、チエルは真剣な顔になった。

「ふ〜ん。まさか、平和主義のスカイがそんなこというなんてねえ」

「だけど、俺は別に他人を殺したりしないぞ。」

「……………」

「なんて言うかなあ〜、別に俺は、殺しとかそんなことは

する気はなくて、え、えっとだから、これは俺の“運命”なのか
な
って」

「運命？」

「まあ、そんなところかな」

「ふん…」

「？」

「それじゃあ、そっさと準備しないといけないじゃないの？」

「は？」

「だからファミリーを探しに行くんでしょ？」

「もう行く気になってる！？」

「だって、スカイがボスになるのが“運命”なら私がファミリーに
なるのも“運命”でしょ？」

「まあ、そうなるかも」

「じゃあ、ほら早く支度支度」

「数分後」

支度を終了。

「で、何処に行くか決まっているのか？」

「……。」

「何も、考えてなかったのかよ!？」

「めんど。でも、スカイだって考えてなかったんでしょ?じゃあどこ行く?」

俺の家にあった地図を広げながらワクワク感が止まらない様子のチエルに呆れたスカイだった。

「そ、それじゃあとりあえずチエルが住んでた街に行こうか」

「わかった。それじゃあ行こ」

とチエルはスキップしながら扉に向かっていった。
が、次の瞬間

ばんっ! バキッ!

またチエルが扉を壊しました。アハハハハハ
もういやー!ー!

〜それから数分後〜

出だしから最悪だった。

まずチエルの扉の破壊。

その次に街に行く道が岩雪崩が起こり

通行禁止に。そして今は……

「ここ何処だよー！ー！」

俺たちは街を目指すために森の中で迷子だった。
何故入ったのかって？

「チエルが後先考えずに森に走っていったからこうなったんだろー
ー！ー！」

どうすんだよ！？今は昼なのにこの森は光すら入ってねーんだぞ」

俺は、迷子という“不安”とお化けが出るという“恐怖心”のせいで完全にパニックっていた。

「よし。こうなったら」

チエルが何か考えたらしい。

チエルは、落ちてある枝の先を持ち地面に垂直に立てて
チエルは、枝を離れた。勿論のこと枝は倒れる。

まさか！ー！という顔でチエルの顔を見た。

そのまさかだった……

「よし、こっち」

チエルは、倒れた枝の先の方の方角に指を指しながら言った。

「そんなんじゃ決めるなあー！ー！ー！」

「大丈夫大丈夫。案外成功するから。」

「案外付けやがったー！ー！」

それから、俺たちは街についたのは、

チエルの作戦（？）をアレから47回繰り返した後だった……………。

泣きたい……………。

第四話 旅、開始！（後書き）

スカイ「どうして俺がこんなことにー！ー！」

そんな事より新キャラだよ。

スカイ「スルーかよー！ー！」

ドサイドンのログ君です。

ログ「宜しくたのむぜ。あとボスもな」

チエル「ボスって？」

君はまだいいの！知らなくて。

第五話 街十出会い（前書き）

チエル「長かったね」

まあ、テストもあったしね。

第五話 街十出会い

なんかかんやで森から抜け出したスカイ一行（ただいま二人）
その時二人の考えていたことは：

（あゝ楽しかったゝ）

（次から絶対チエルと一緒にあの森に入らない
まず、あの森に入らない！）

わかっているだろうけども、上がチエルで下がスカイ
が考えていることです。

そして、なんかかんやで街に着きました。

チエルが住んでいる此の街に名前は“ ロッソ ” という名前。

ん？名前が変だって？それになんやかんやが多い？
そこは気にしない♪

「なあ、俺たちってさあ」

「なあに？」

「正午ぐらいに家から出たよな」

「うん。そだよ♪」

「なのに……」

〽約一時間〽

二人は、さっきの漫才(?)していた場所にいた。

「何で何処の宿も満室なんだよ!」

「私に言われても知らないよ!」

「何故♪なんだよ!?!」

二人はあの後に街の宿に泊まれるところを探したが全ての宿が全て満室だった。

「とりあえず、何処か行こうか」

スカイは小さく頷いた。

〽数分後〽

「やっぱりさあ、チエル家のほうがいいんじゃないの?」

「いやって言ったらいや!」

「はあ……」

スカイがため息を漏らした。
がその時

「!?!」

チエルの腕が誰かに引つ張られた。

「チエル!？」

スカイが今さっきまで隣にいたチエルがいないことに気がついて後ろに振り向いた。

「!」

後ろには、一本の腕でチエルの首を抑えて、そしてチエルの首にナイフを当てていたカイリキーがいた。

うん。この光景はよく漫画で見たことがある。

“人質” って言うやつでしょ？

「そこのお前! こいつを殺されなくなったら、金をY「ねえ、スカイ」私って今人質?」おい! てめえ今の状況わかってんのか!」
わかって無いに決まってるでしょうが! お前は馬鹿ですか! ?
この天然に状況が分からないに決まってるでしょ!

「おい! お前早く金用意しY「ねえ、だから人質?」だからうるせえ!」

「まあ、人質だろうね」

スカイが呆れながらそういった。

「ふん」

『反応薄!!』

スカイやカイリキーそれに野次馬たちが
見事にハモった。

「とりあえず、スカイ助けてー（棒読み）」

『棒読みだ!!』

またハモった。

「さあ、どうするお前？」

「うーん、いいやチエルが
いると振り回されるだけだし
それじゃあ」

『あっさり見捨てた!!』

「スーカーイー!!」

チエルが怒りのボルテージがいきなり急上昇に。

「あ! いねえ!」

カイリキーが気づいた時にはチエルは既にいなかった。

「スカイーーーー!!」

「ぐはああ!!」

チエルは、スカイに飛び蹴りを後頭部にぶつけた。

「いってー！ー！」

「スカイはいつもそうだからモテないのよ！」

「お前が、いつも俺を振り回すからだろ！」

「おい！俺忘れてないかあ！」

カイリキーが俺たちに叫んだ。
まあ、そうなるだろうな。

「仕方ないから、俺が相手しまーす」

スカイがやる気なさそうに言いながらカイリキーの方に近づいていた。
った。

「てゆーか、ポケ役みたいな感じ出してない？」

とその時チエルの方には一人のエルレイドが近づいていった。

「あのスカイって子大丈夫なのかい？」

「大丈夫でしょあいつなら」

その時カイリキーとスカイはにらみ合っていた。
と次の瞬間先に動いたのはカイリキーだった。

カイリキーの四つの拳は電気がまどっていた。
“かみなりパンチ”だ。

「これで終わりだ、小僧！」

カイリキーがスカイに接近しながら言った。

「あのままじゃあ危険だ！」

エルレイドが叫んだ。だが、

「スカイなら心配ないよ」

チエルは、“普通”に言った。

「？」

エルレイドの頭にはクエスチョンマークが浮かんでいた。

「大丈夫だって、見てたらわかるよ☆」

そんな時でもカイリキーは、スカイに近づいて来ていた。

「地獄を見せて……」

カイリキーはスカイの目の前に倒れた。

チエル意外はこのこと驚いていた。

「一体何が!？」

「あゝ、あれは、まずスカイが高速移動でカイリキーの後ろに回って後頭部にきあいパンチを当てて高速で元の位置に戻ったんだよ。多分、頭蓋骨割れてるね。」

「頭蓋骨!?!」

とチエルは笑いながらいった。

「おい、チエル行くぞ」

カイリキーが倒れている前にいるスカイがチエルを呼んだ。

「うん。わかった」

チエルはスカイのところまで走っていた。

(もしかしたらあのスカイって子は……)

「で、どうするこれから?」

「どうしようか?」

「こっちが聞いているんだ」「あのお」ふへっ?」

いきなり後ろから声をかけられた。

「えっと、何ですか?」

「あ！さっきの人！いやポケモン！」

そう後ろから話しかけたのはあのエルレイドだった。

チエルはスカイに此のエルレイドに出会った時の話をした。（スカイのバトルの解説だけだが）

「ふうん、で、何かようですか？」

「もしかして、ピースファミリー十代目ですか？」

「！！」

「WAO！！すぐバレ！」

「やっぱり十代目だったんですね。」

「あなた誰ですか？」

スカイが恐る恐る聞いた。

「私は、九代目のもとにいたエリスと言います。」

「新キャラですね。ありがとうございます」

第五話 街十出会い（後書き）

というわけで新キャラのエリスです。

エリス「どうも、エリスといいます。流石ですね十代目！」

スカイ「え？そうかな？」

チエル「でもスカイって今回は力を二割ぐらいしか使わなかったよね。」

エリス「に、二割ですか！」

チートだね☆

第六話 アジト（前書き）

やっと更新だあゝ。

スカイ「やっとだゝ」

チエル「今回も新キャラ出てくるの？」

うん。

スカイ（今回グダグダだ！）

第六話 アジト

「私は、九代目のもとにいたエリスと言います。」

「!!」

「マジですか？」

「マジです。」

「ガチですか？」

「ガチです。」

「マジでガチですか？」

「マジでガチd」「いつまで続けんだー!!」…「すいません十代目」

「で？俺たち何か用ですか？」

「多分、此の街の宿は全て満室と思ひまして十代目たちをアジトに連れていった方が良くと思ひまして探していたのです。」

「何で満室なんですか？」

「それは、明後日にこの街でバトル大会があるからです」

「そんなのもあったね」

「それ先に言え!! 何が『そんなのもあったね』だよ! そんなことを教えてくれれば俺達はこんなに疲れることはなかったのにー!」

「とりあえず、アジトに向かいましょう」

「はい」

「……はい」

スカイのテンションは一気に下がってしまった。

〽数分後〽

「ここです」

エリスは、ある一つの建物を見ながら言った。

「あの〽エリスさん。本当にここですか？」

スカイは、その建物を指をさしながら言った。

「ええ。一応ここがアジトです」

「ここどう見たって喫茶店ですよね」

そうエリスがスカイ達を取れてきた場所とは、何処の街もありそうな喫茶店だった。

「これは、単なるカモフラージュですよ」

でも何故に喫茶店？

「とりあえず、中に入りましょうか。」

エリスが喫茶店の扉を開けながら言った。
スカイ達は喫茶店^{アジト}に入ることにした。

「ここ本当にアジトですか？」

中も普通の喫茶店だった。客は今は来ていなかった。
とその時、

「いらしゃいまS……何だお兄ちゃんか」

奥の部屋からサーナイトが出てきた。

「十代目。私の妹です」

とエリスは言った。やっぱりね。

「お兄ちゃん。そちらの方は？」

サーナイトは、俺たちに気づいたようだ。

「こちらの方は、私たちのファミリーの十代目のスカイ様だ」

何故かスカイ様って言われると恥ずかしくなる。

「初めまして、十代目。私はミーシャです。宜しくお願いします。」

「こ、こちらこそ」

「私は、まだ仕事が残ってるので失礼します」

ミーシャは、お辞儀をしてさっき出てきた奥の部屋に入っていた。

「それでは十代目、私たちは上の階のアジトに行きましょう」

ミーシャが入っていった部屋を通り過ぎて

一番奥の『関係者意外立ち入り禁止』と書かれた紙が貼ってあった部屋に入って階段を登った。

「この先がアジトです」

「予想通りな感じありがとうございます」

階段を登った先に扉があった。

アジトの中は綺麗で値段が高そうなソファや机があった。

一言で言うと大金持ちの家だ。でも何故だか下の階より、この階の部屋のほうが大きく見える。

「十代目は、あそこの奥の部屋を使ってください。チエルちゃんは、十代目の隣の部屋で」

スカイは言われた部屋に入って部屋のベットに倒れるように横にな

った。そしてスカイは睡魔に襲われそのまま眠ってしまった。

その晩、“ ロッソ ” から大分離れた城では、

「九代目ゝ入るぞ」

と言って部屋入って来たのはエンペルトだった。

「あらゝ、スパツィオ」

スパツィオと言われたのはエンペルトだ。

「どうやら十代目達はもう旅を始めたみたいだな」

「へえゝ案外早いわね。もうちょっと先かと思ってたわ」

九代目は苦笑しながら言った。

「多分原因はチエルだと思うが」

「帰ったら娘に怒鳴るつもり？ 可哀相だと思うけど？」

「自分の息子を小さいときに一人させたお前が言えるセリフか？」

その時、部屋に誰かがテレポートしてきた。

「エリスまで来たのね。やっぱりいいわね」
“ ロッソ ” からここまでだいぶの距離があるのにテレポートで一瞬なんて」

テレポートしてきたのはエリスだった。

「それより九代目、十代目達は誰かに命を狙われています。」

「どういう事か教えてくれる？」

九代目の目つきが変わった。

「十代目達が街で宿を探している時に怪しい奴を見つけ捕まえました。そいつが十代目の命を狙う目的だけ分かりました。ですがそいつは私が目を離している隙に自害しました」

「そりゃあ自分のファミリーのこと普通言わないからな。

でもまさか、“ 雲 ” と謳われたお前がこんなミスをおかすとは」

「すまない」

エリスは謝罪した。

「別に気にしないでいいのよ。

スカイが“ ロッソ ” にいる間よろしくね。エリス」

「はい」

第六話 アジト（後書き）

チエル「今回私出番が少ない！」

気にするな。それより新キャラのミーシャだ。

ミーシャ「よろしくお願いします」

それともう一つ

コロネ島のコロネはイタリア語で「色」という意味で
ロッソはイタリア語で「赤」という意味です。

チエル「へえへえへえ」

ミーシャ「3へえですね。」

ト○ビアの泉か！しかも3へえ！？
少ない？

チ・ミ「次回もお楽しみに」

無視かよ！

第七話 嵐（前書き）

この小説も非ログインユーザからも感想を受付することになりました。

スカイ「つまりユーザ意外の方でも感想を書けるという事か。」

そゆこと♪でも、荒らしとかはやめてください。

第七話 嵐

「ん〜あれここ何処だっけ？」

寝ぼけ混じりのスカイ起床。

「あっ！そういうばここアジトの中だっけ！」

スカイは「今、何時だろう？」と呟いて時計を探した。とその時、突然扉が開いた。

「十代目おはようございます。」

と言ったのはミーシャだった。

「おはよう。ところで今何時ですか？」

「今は七時半ぐらいです。」

いつもより一時間起きるのが遅かった。多分昨日の疲れのせいだろう。

「十代目。朝食の用意が来ていますが…」

「う、うん。わかった」

スカイは部屋から出た。

「で、何処で食べるんですか？」

「地下です。」

「ええええ！地下にもアジトがあるの！」

「はい。ここは九代目が作らせたものですし。」

「母さんが！？」

「はい。アジトは広い方がいいでしょ♪って言っていました。」

でも喫茶店でカモフラなんだー！

「それでは、行きましょうか」

階段隣のエレベーターで下に降りることにした。

く地下アジトく

「うっわー大きいっ！！」

地下アジトは二階よりも結構大きかった。

そんな広いアジトの一室のテーブルの上には
ゴージャス感が漂う朝食が並んでいた。

そんな部屋にはエリスが先に来ていた。

チエルは……………やはりいない。

そういえばあいつ朝弱かったんだよな。

まだそんな設定生き残っていたのか……。

「さっき私がチエルちゃんを起こしにいったのですが
まったく起きる気配がありませんでした。」

「あとで私が起こしにいつて来ますので十代目は先に食べといてく
ださい。」

みなさん。どちらがエリスかミーシャか
お分かりですか？

正解は、上がミーシャで下がエリスです。
何やってんだろ俺……………。

というわけでお先に朝食をいただくことになりました。

「…おいしい」

「そうですか？ならよかったです。」

後でどう作ったのか教えてもらおう。

「ところで十代目。今日どこに行くつもりですか？」

「え？まあ、ちょっと街を見てまわろうかな〜って
あ、ごちそうさまでした。それじゃあ行ってくるよ。」

「いってらっしゃい十代目」

とアジトから出て街を見て回ることにしたが……

「なにしよう……」

何も決めていなかった。
そんな時、

「おい！」

後ろから声をかけられた。
嫌な予感がする。

振り返ったらそこには一匹のバクフーンがいた。

「てめえがピースファミリーの十代目だな」

い、いきなり……！？
てかそれバレたらまずいんじゃないの……！？

「ちよっくら試させてもらうぜ」

というワケで今は街のバトルフィールドに強制的にいる。

「俺の名前はグレイだ。てめえのことは、ラルクって言う奴から聞いたぜ。」

ラルク……！3、4話ぐらい出番なかったラルク
から聞いたってことは……。

そんなことを考えていたら、いきなり、右から蹴りが飛んできた。

「っ……！」

スカイは、それを右腕で防いだ。

この蹴り…お、重い…

だけど…

「なっ……！」

スカイは、左手で、グレイの足をつかみ、そのまま投げた。

が、グレイは、綺麗に一回転して地面に着地し、スカイの方を見た。

「な、なにっ……！？」

そこに、スカイの姿はなかった。

少し視線を上げると、スカイがいた。

「“ブレイズキック”！」

「くっ……“火炎放射”！」

スカイのブレイズキックに対抗して、グレイは火炎放射を放ったが、スカイの技の力がグレイの力よりも強く、火炎放射を打ち破った。

「くっ……！」

グレイは体を逸らし、ブレイズキックをかわした。

さっきまで、グレイのいた場所に、スカイに足がめり込んでいた。

（なんだこの力は……！）

「くそっ……！ “影分身”！」

グレイは、影分身で自分の無数の分身をつくり、スカイを囲んだ。

「数が増えればいいって問題じゃないよ」

スカイがそう言うと、スカイの周りから突風が吹き出した。

「な、なんじゃこりゃああああああ！！」

突風にとばされないように踏ん張るグレイ。

それからすぐに、突風は止んだが、分身は消えてしまった。

「一体何が起こったんだ？」

どうなっているのかわからないグレイ。

「風を操ったんだよ〜ん♪」

「！！」

スカイでもグレイでもない声が聞こえた。

「チエル。お前何時からいたんだ？」

「『おい!』ってトコから♪」

「最初からじゃん」

「じゃあ教えちゃうよ♪
スカイには生まれつき“風サイクロンを操る力”を持っているんだよ♪」

「なんだか、勝手に命名されちゃってるけど……。サイクロンってなんだろう？」

「そんなこと気にしない♪」

「何だか滅茶苦茶ウザイ。」

「気にしたら負けさ!!」

「誰だよ」

そんなコント(?)を続けていた時、

「流石十代目っす!恐れ入りました!」

グレイの方を向くと土下座していた。

「え!?!?どういうこと?」

「WAO!土下座☆」

「実は、ラルクっていうミュウに話を聞いて

俺のボスがどこまで強いか試したかったです！」

「え？つまり 그레이が、」

「そ♪君のファミリーだよ♪」

後ろを振り向くとラルクがいた。

「あ！ラルク久しぶり〜♪3、4話ぶりだね〜」

あっ、さっき俺が思ったことだ。
ってそんなこと置いというて。

「 그레이が俺のファミリーなの！？」

「うん。“嵐”の守護者だよ」

「ええ！！」

「やっぱり十代目は強いっす！
バトル大会で十代目の力を見せつけてやりましょう！」

「何でバトル大会！」

別にバトル大会に出る気無いんですけど〜

「十代目は聞いてませんでしたか？
俺はラルクから聞いたんすよ」

「どういう意味だよラルク！」

「僕はチエルちゃんから出るって聞いただけだよ」

「チエル！お前かー！ー！」

「大丈夫だってスカイなら優勝するって」

「そういう問題じゃねー！ー！ー！」

「バトル大会まであと一日」

「明日かよ！！」

第七話 嵐（後書き）

一応これまで出てきたキャラをまとめてみました。

- ・スカイ
- ・チエル
- ・グレイ
- ・ラルク
- ・エリス
- ・ミーシャ
- ・ログ
- ・九代目
- ・スパツイオ

の9名でした。ちょっと多すぎるかな？

ラルク「僕にもやっと出番が」（泣）」

はいはいわかったから。

次回をお楽しみに。

第八話 バトル大会 第二回戦！ (前書き)

更新遅れて本当にすみません。

何だかグダグダだゝ

スカイ「久々の更新なんだからもうちょつと
グダグダじゃなくてもいいのに(汗)」

なんでかねゝ

第八話 バトル大会 第二回戦！

「うわっ！ 広っ！」

今、俺達はバトル会場に来ている。

なんか此の街に驚かされてばかりだ……。

「バトル会場の大きさは、ぶっちゃけ東京ドーム二つ分ぐらいかな
」

とチエルは言っていた。東京ドームって？

「十代目トーナメント表見てきました」

「あ、ありがとうグレイ。ところでどうだった？」

「はい。俺たちのチームは、Aブロックの一番初めでした。」

「よくあるパターンきたー！ー！ー！」

いきなり最初になるなんて……（汗）

「十代目俺たちもうそろそろ行かないと開会式始まりますよ」

「あ、うん」

とりあえず、俺たちは開会式に向かうことにした。

〽数分後〽

開会式も終わっていいよAブロックの第一回戦。

「何だかドキドキするな」

「それじゃあ、私が行くね」

最初はチエルが行くらしい。

「いきなり負けるんじゃないぞ！」

「わかってる♪わかってる♪」

本当に分かっているのか……

ところで相手チームはというと、

「なはははは、この勝負俺たちチーム・デーボレがいただくぜ」

と大声で叫んでるのはどくがポケモンのドクケイルだ。

「あいつぜってー締めてやる！」

グレイがあいつらが気に入らないのか少し怒っている。

そして、いつの間にかチエルの対戦相手がバトルフィールドに上がっていた。

「相手は、あのストライクみたいっすね」

そうフィールドに上がっていたのはかまきりポケモンのストライクだ。

「チエル選手とクレアート選手、準備はいいですね?…それでは、第一試合、初め!」

審判であるエビワラーが勝負の始まりを告げた。が、

“ハイドロカノン”!」「ぎゃあああああああ!」

「……クレアート選手あっけなく戦闘不能!チエル選手の勝ち!」

「審判が『あっけなく』って言っているの……!」

クレアートと呼ばれたストライクは、その仲間達によって運ばれた。

「それでは、第二試合の選手、前に出てきてください。」

「くそっ!クレアートがやられたか!だが、俺はそんな簡単には負けないぜ!なはははははははは」

と、言っつてフィールドに出てきたのはさっき大声で勝利宣言をしていたドクケイルだ。

「マジキモイWWW」

「あの野郎！ぜってー潰す！」

なんかグレイが！これはヤバイかもしれない！

「グレイ、やりすぎじゃだめだよー！」

一応、注意しておこう。

「わかってますって、十代目」

ってそう言いながらすごいオーラ出してるしーーー！

これもうだめかも………（汗）

「それでは、グレイ選手とマイル選手、準備はいいですね？

それでは、初m「“火炎放射”！」「ぎゃあああああああ！」

：マイル選手あっけなく戦闘不能！グレイ選手の勝ち！

よってチーム“ピース”は第一回戦突破！」

「ちょっとまってえーーーい！」

と、その時、突然マイン（ドクケイル）は叫んだ。

「？何ですか？」

「今さっき、あいつフライングしただろう！」

た、確かにさっき審判が「初m」って時に攻撃してたし

「気分的にOK！」

「ガーン！」

「理由それーーーーー！」

「それでもお前審p「しつけーんだよ！てめえは！」ぐはあああああ
あああ」

マインが審判に再び反論しようとしたとき 그레이のアップーが、マインに直撃。そのまま吹っ飛ばされた。

「お前ら覚えていろよおおおおお！」

マインは飛ばされて星になりました☆

「マイン様ああーーーーー！お前たちマイン様を助けに行くぞーー！」

『オオーーー！』

マインの（多分）部下たちは飛ばされたマインを追いかけてどこかに行ってしまった。

「案外弱かったですね。」

「弱かったね」

「た、確かに……早かった……」

“弱いって言うなーーーーー！”

と、何処からか叫びが聞こえたが三人は無視した。

“ 無視するな――――！！”

と再び叫び声が聞こえたが三人は無視をして
控え室に戻った。

第八話 バトル大会 第二回戦! (後書き)

何かグダグダすぎだな……何故だあああああ!

スカイ「俺に言われても……(汗)」

あ、スカイ。こんなもの作っただけかどうか思う?

Aブロック

チーム ピースVSデーボレ

チルドレンVSミステリー

御三家VSミニマム

スーパージVSメタル

Bブロック

チーム アイスVSビッグボディ

どくどくVS風

はらっぱVSゴースト

ブロックVSパワー

スカイ「何ですかこれ?」

見ての通りの大会のトーナメント表。勿論、全チームでないけどね。それと、C、Dブロックは次回ね。

どのチームとスカイたちと当たるか予想してみてください。

第九話 新たな仲間！そして……（前書き）

更新遅れて本当に申し訳ありません！

今回は二回戦！……では無くて！

ラルク「少し読者を裏切りましたね」

では、どうぞ！

第九話 新たな仲間！そして……

今、スカイ達は、次の第二回戦のバトルに備え控え室にいた。

その時、突然放送になった。

『えーっと、Aブロックのチーム・ピースの二回戦の相手であったチーム・ミステリーですが、突然の棄権ということでチーム・ピースは不戦勝ということで三回戦進出です』

「ええええ！」

スカイ達は驚いた。

そりゃあそうだけどね（汗）by作者

と、その時

「スカイクくん」

何処からかスカイをよぶ声が聞こえた。

スカイは声が聞こえた方を向いた。

そこには、控え室の扉からひよこっとな顔を出して手招きをしているラルクの姿があった。

「ラルク、何してるんだろ？」

スカイは、ラルクの方に向かった。

くバトル会場 廊下く

今、他の第二回戦が行われているため、廊下にはラルクとスカイしかいない。

「それで、俺に何か用？」

「スカイ君たちには、今からアジトに帰ってもらおうよ」

「ええ！まだ三回戦があるのに！？」

「この大会は、初日は第二回戦までしか無いんだよ。対戦チームが多くてね」

「そ、そうなんだ……でも、どうして？」

「君たちの二回戦の相手のチーム・ミステリーは、ピースファミリーの同盟ファミリーのアンノウンファミリーなんだ」

「ええ！そうだったの！？」

「うん。実は彼らに十代目である君の援護をこっそり頼んでたんだ」

「援護って！まさか、俺誰かに狙われてるの！？」

「そうみたいだね」

「普通に言ったね（汗）」

「とにかく！君たちは先に帰ることだよ」

そう言うのと、ラルクはテレポートで何処かに行ってしまった。

「ちょー！ラルク！……行っちゃった……とりあえず、グレイ達にも知らせよう」

スカイは、グレイ達のいる控え室に向かった。

〽“ ロッソ ” の大通り〽

「す、すごいね。大通りに誰もいない（汗）」

そう、昨日まで賑わっていた大通りに誰一人いなかった。

「そりゃあそうっすよ。この街の奴らはバトル会場に行ってるか、家でテレビ中継を見えますから」

「へ、へえ」

そんな話をしていて…

————— ああああああああああ！！！！？？

「？ 何処からか声 gぶっ！ー！」
「へぶっ！」

空から何かが落下してスカイの頭にヒットした。

スカイは、力尽きた。

「コンチクショウ！報酬金が18000Zも減ってしまった」

「モン○ンか！てか、金高え！つか、俺にツツコミさせるな！」

「そんなん知らんがなWWW」

「十代目！大丈夫っすか！」

「……………」

「返事がない。ただの屍のようだ。」

「チエル何言ってやがる！」

スカイは、気絶していた。

「一体何が！？」

「コイツらしいよく空から落下して来たの」

チエルがスカイの近くで伸びていた奴を指さした。

「こいつは……フライゴン！？」

そう、落下してきたのはせいいいポケモンのフライゴンだった。

「とりあえず、チエルはコイツを運べ。俺は、十代目を運ぶ」

「あいあいさゝ よいしょっと」

チエルは、軽々とフライゴンを持ち上げた。

（チエルって力持ちなのか？）

グレイは、驚いた。

くアジトく

「…ん？…ここは？」

スカイは、目を覚ました。

「目覚めましたか！？十代目！」

「あ、グレイ。あの時何が起こったの？」

スカイは、頭を摩りながら言った。

「それは、あいつが空から落ちてきたんです」

グレイは、もうひとつのベットでのびているフライゴンを睨みつけた。

「もしかして、あのフライゴン？」

「はい、そうっす」

「でも、どうして落ちてきたんだろ？」

と、その時

「……？あれ？ここは？」

グッドタイミングで目覚めた。

「あ、目が覚めた。君はどうして落ちてきたの？」

が、フライゴンはポカーンとなっていた。
いや、マジで。

「お、おい」

スカイが、フライゴンの目の前で手を振った。
すると、フライゴンが我にかえた。

「……が……べ……」

「へ？」

「ポケモンが喋った……！！……？……？」

『はい？』

スカイ達は、この言葉の意味がわからなかった。

「ど、どういう意味？」

「何でポケモンが喋ってるんだろ！？錯覚かな！？何処かに頭ぶつけたとか！？これは夢かな！？」

なんてブツブツ言ってる。

「てめー、何言ってるんだ！」

「や、やっぱり喋ってる！？」

やっぱり変だ。(汗)

「じゃ、喋ってるってどういう事？喋るのって普通だけど？」

「ぼ、ポケモンが喋るなんて聞いたことがない」

「ポケモンが？」

「う、うん。だって、僕人間だもん」

『はい？』

見事にハモった。

「えーっと、君人間じゃなくてフライゴンなんだけど……」

「へ？」

フライゴンは、自分の手を見た。
その瞬間、フライゴンの顔が真っ青になった。

「……僕……フライゴンになってるーーーーー!!」

「ポ○ダンみたいなことありがとうございます」

つまり…どゆこと？

「人がポケモンになるなんて、ホントポ○ダンみたいだね」

「まったく隠せて無いよ……。とりあえず、君の言うことは信じるよ」

「ほ、本当？」

「う、うん。だから、何か心当たりはない？」

「心当たり……」

フライゴンは考え込む。

「………わからない。」

フライゴンは、そう呟いた。

「え？」

「わからないだ。てゆーか、何も思い出せないんだ。」

「記憶喪失？」

フライゴンは、コクンと頷くと「多分」と言った。

「本当にポケ○ンみたいな展開ありがとうございます」

「それを言うな（汗）」

「で？ところで君の名前は？」

チエルが尋ねる。

「……レント」

「へ？」

「僕の名前は、レントだよ」

レント……結構普通な名前だな。

「で？他に覚えているのは？」

チエルが興味深々に言う。滅茶苦茶ワクワクしてるよ（汗）

「……他は、何も思い出せな「たっだいま」？」

誰かが帰ってきた。
その誰かとは、

「ラルク！」

ラルクでした。

その時、ラルクがレントが居ることに気付く。

「あ！レント君、数時間ぶり〜って言っても憶えてないか」

「！！」

その場にいた全員が驚く。

「え！？レントの事知ってるの？」

「勿論♪だって、レントくんをここに連れて来たの僕だもん♪」

「はああああ！！？」

「WAO！ナイスリアクション」

「ど、どうして連れて来たの？」

恐る恐るラルクに尋ねる。

「君が、ファミリーの晴れの守護者に相応しいからだよ♪」

「！？」

一同驚く。

ただし、レント抜き。

「?」どういう意味? ファミリーって?」

レントは、まったくわかってないらしい。

「うーん、簡単に言えば君は、マフィアに雇われたんだよ。」

「……え…ええええええええええええええええ！」

レントの叫びが街中に響いた。

「あとは、ボスである君が教えてあげてね。」

ラルクは、スカイの肩をぽんと叩いてレポートで何処かに行ってしまった。

「ちよっ！ラルク！」

「あのヤロー！十代目に押し付けやがって！」

「ま、まあ別にいいけどね」

スカイは、そう言うレントに自分の知っていること（マフィアとか）を話した。

それから、数時間後……

AM 4…30過ぎ。

スカイ達が、熟睡している時間帯。

「ふうー」

とある一室にミーシャいた。

手に持っている本を読み終わると、小さくため息を吐き本をパタンツと閉じた。

「…あ、もうこんな時間……」

ミーシャは、壁に掛けてあった時計を見ながら言った。

「うーん、恋愛小説を読んじやうと夢中になってしまふ癖をなおさなくちゃな」

スカイ達が居るときの口調と全く違う。

ミーシャは再び小さなため息を吐いた。
と、その時

！……殺気！外に方から！

ミーシャは近くの窓を静かに開けて外を見た。
が、まだ4時過ぎだ。外の様子がまるでわからない。
ミーシャは、外に出てみることにした。

ミーシャは、そつと玄関の扉を開けて外に出て周りを見渡した。
何かいる！そんな気がした。

ザッ！

何処からか足音が聞こえた。ミーシャはその足音の方を見た。

「誰ですか！？」

そこで見たものとは……

「！あなたは……！」

ドスッ！

「……え……？」

何かがミーシャの体を貫いた。

街の道に生暖かい赤い液体が飛び散る。

「な……なん……で？」

ズボッ……

ミーシャの体に突き刺さった何かが抜かれたと同時に

ミーシャの体が地面に倒れこむ。

…ぐっ…まさか“貴方”が…このままじゃ十代目たちが危ない…

そのままミーシャは、意識を失った。

第九話 新たな仲間！そして……（後書き）

チエル「うっわあゝ久々の更新だと思ったら予想以上のグダグダ」
うぐっ！

ラルク「えーっと、初登場のレントくんですが、実は臆病者で頭が悪くヘタレという設定です。」

チエル「うわゝ作者にそっくり」

作・レ「マジヒドス（；ω；）」

ミーシャ「ところで、私はどうなるんですか？」

知らん。

ミーシャ「……………」（泣）」

えっと、C、Dブロックのチーム紹介は次回にまわさせてもらいます。

では。

第十話 ラルクの戦いとチエルの謎（前書き）

遅くなってしまいました。

ラルク「遅すぎですよ！」

まあまあ。グダグダかも知らないけど……
ある漫画のネタ少し取っちゃたけど……
とりあえず、どうぞ！

第十話 ラルクの戦いとチエルの謎

スカイたちが、何も知らないレントに自分の知っていること（マフイアとか）を話している
同時刻。

何も無く辺り一面が真っ白な世界。

つまり、何も無い『無』の世界。

そんな何も無い世界に一匹のポケモンがいた。
はどうポケモンのルカリオである。

だが、このルカリオは普通のルカリオとは違い、普通のルカリオの体の青色の部分が、白色だった。つまり“色違い”である。

そんな彼の後ろに、突然一匹のミュウが現れた。

ラルクである。

「……君だよね。アンノウンファミリーを襲撃したの……」

ラルクの声に、ルカリオが振り返る。

『あつ、ラルクちゃん♪よく僕が襲ったってわかったね♪』

「……僕がわからないとも思ったの？君も少しは、“感情”を持ったらどう？」

『いや〜どうでもいいじゃん』

「スカイクン達の敵だと言うことには確かみたいだね」

『うーん。ま、そうかな。あつ、そういえば名前を教えてなかったね。僕は“マミル”っていうんだ。よろしくね♪』

「僕は、敵に馴れ馴れしくする気はないよ。」

そう言うと、ラルクは何処からか刀を取り出した。
その刀は、バチバチと電気をまとっていた。

「死んでもらうよ」

ラルクがそう言うと、一瞬にして姿が消えた。
と思ったら、いつの間にかマミルの後ろにいた。

『!』

「遅いよ。」

ラルクは、そう言うと同時に刀でマミルの背中を切った。
マミルは、そのまま倒れてしまった。

…………おかしい。アンノウンファミリーを倒した奴がこんなに簡単に倒れるわけが無い……………。

と、その時…

ムクッ

「!！」

なんとマミルが何事の無かったように起き上がった。

……………え…!？

『あー、痛いなー。ラルクちゃん少しぐらい手加減してくれてもいいんじゃない?』

……訳がわからない。どうしてこんなに何事も無かったようになってるの!？

『?どうしたの?』

「……………どうやら、手加減なしで良いようだね」

ラルクがそう言うのと、電気を纏っていた刀が今度は炎を纏った。

『ふーん。少しは殺る気になってくれたかなー?』

マミルは、そう言う又何処からか双剣を取り出した。

『それじゃあは——』

ガキンッ！

マミルが言い終わる前にラルクは、斬りかろうとしたが防がれてしまった。

『そんなに急がなくてもいいんじゃない？』

「……くっ！」

『それじゃあ、今度は僕の番だね』

マミルがそう言うラルクを弾き飛ばした。

『それで終わりだと思わないでよね♪』

そう言うラルクに向けて剣を突き刺した。

だが、そのラルクは光の粒になって消えてしまった。

『……！ “身代わり”！？』

「そうだよ。」

後ろからラルクの声が聞こえた。

その声に、マミルは振り返ろうとした。が……

ガシッ

『…え』

ドカアッ！

突然、頭を鷲掴みされた。

と思ったらおもいきり誰からに腹を殴られ吹っ飛ばされた。

『えーと、誰？』

マミルは、先ほどと同じように何事も無かったように起き上がって聞いた。

白い体に尻尾がジョット機のような感じで白い翼には爪がついていた。

そこにいたのは、はくようポケモンのレシラムだった。

「元ピースファミリーのボス…だよ」

レシラムは、そう答えた。

『……あー、ラルクちゃんかー♪一瞬誰だかわからなかったよ！流石ラルクちゃんだねー。そういえば、ラルクちゃんは昔ピースファミリー？セコインド世だったらしいね』

「……さっさと降参したらどうだい？今ならまだ貴様を殺さずに済むよ？」

『うん。参った。僕の負けだね。』

「!！」

マミルの言葉に驚きを隠せなかった。

『やっぱりラルクちゃんは強かった。僕の目に狂いはなかった。これなら、スカイ君たちを任せられそうだねー』

「どういう意味？」

『話さなきゃいけなくなったね。僕が何の目的で君と戦ったかを――』

「!戦った目的って――――」

ドスドスドスッ!!

ラルクが言いかけ時、体に無数の剣が体に突き刺さった。

「――――ッ!!」

『だから、目的は“暇つぶし”だよ。』

いつの間にかラルクの体は、レシラムから元に体に戻っていた。

「き、貴様ああああ!!」

『それじゃあ、もうそろそろ終わりにしよっか?』

そういうと、また何処からか剣を取り出してラルクに近づいていく。
そして、ラルクの目の前まで来た。

『バイバイ。』

「……………」

グサツ

マミルの剣は、ラルクに突き刺さったが、ラルクは、光の粒になつて消えた。

『…………ふうん。逃げられちゃったなー。まあ、いつか♪』

そう言うのと、マミルの姿は消えた。

それから数分後……

くロツソく

の裏路地に、まるで殺し屋やマフィアなど裏社会の住人が集まりそうなバーがあった。

『ふうく、ラルクちゃんのおかげで、暇が潰せてよかったよ。』

そんな喫茶店の前に、さっきまでラルクと戦っていたマミルがいた。しかし、戦っていた傷は何故か完治していた。

『おじゃまします』

マミルは、そう言うどバーに入っけいった。

『…ん』

マミルは、入っけいきなり視界に入っけのは、壁に背を預け、片腕で今にも溢れそうなのポップコーンが入っけ袋を抱えっけるエンペルトの姿だっけ。

『あー！チエルちゃんじゃーん♪どーしてこんな所に？』

エンペルトの正体は、チエルだっけ。

「……………」

『あれー？いきなり無視ー？ひっどいなー！元彼なのー』

「バーカ。もうそんな肩書きねーよ。それにお前があたしの元彼だっけことが一生の恥だ。

お前が、ここに来るっけ聞いて忠告してきただけだ」

『忠告？』

「お前、スカイを殺るため殺し屋を二人雇っけたそうじゃねえーか」

『うん。そうだよー。それで今から、打ち合わせしようとしてココ

に来たんだよ』

「……お前、何が目的だ？」

『うーん。目的かー。明日の朝まで考えとくから明日の朝になったら手紙で知らせるよ』

「相変わらず意味がわかんねえ奴だな」

『そーゆーチエルちゃんだって“一緒”じゃない？それで、忠告って？』

「まず、一つ目は、ラルクを甘く見ねえことだ。あいつ、結局一割ぐらいしか力使ってねえんだから。さっきだって、身代わりで逃げられてたし。二つ目は、そこら辺の殺し屋じゃあスカイを殺せねえぜ」

『へえー』

「それだけ。」

チエルは、そう言う喫茶店の出口の前まで行き、振り返らずにマミルにこう言った。

「言っとくけど、あたしはお前の味方じゃねえから」

『ふうん、僕は君のこと大好きなのになー』

「あたしは、お前のことが大っ嫌いだよ」

そういうと、チエルはバーから出て行った。

『ホントなのになー。チエルちゃんを殺しても僕の気持ちも変わりそーにないもん♪』

第十話 ラルクの戦いとチエルの謎（後書き）

チエル「……………」↑不機嫌な顔

……はい。それでは、C、Dチームの紹介です。

Cブロック

チーム 筋肉VSプラス

死神VSパーヴェント

バトルバカVSビジネス

変態VSプラズマ

Dブロック

チーム フレンドVSソニック

ヒートVSウォーター

エースVSブラウン

サンバVSノーマル

ラルク「この中から一つのチームが出てくるんですよね」

うん。

チエル「……………」↑不機嫌

ラ・作「……………」（汗）

第十一話 バトル大会 Aブロック決勝戦（前書き）

遅くなりましたー☆ぎゃー！火炎放射やめてー！熱い熱い！！

チエル「というわけで今年も宜しくお願いしまーす☆」

スカイ「どういうわけ？」

第十一話 バトル大会 Aブロック決勝戦

〽“ ロッソ ” の病院〽

「ミーシャがやられたってホント!?!」

「…はい。朝の5時頃に」

手術室の前に、エリスとスカイ、チエルにグレイとレントがいた。

手術室のランプはついたままだ。

「見つけられたのが早かったため、あまり世間には知られてません」

「そ、そうなんだ…」

そして、沈黙。

「…十代目達は、もう会場に向かってください」

「え、でも…ミーシャは…」

「ミーシャの事なら任せてください」

エリスは、微笑みながら言った。

「…うん。それじゃあ、頼んだよ」

スカイたちは、病院から出ていった。

「……ミーシャ」

エリスの頬に涙が流れた。

（バトル会場）

「一体誰が、あんなことしたんでしょう」

「…うん。」

その時、ラルクが言ったあの会話が脳裏に浮かんできた。

『まさか、俺誰かに狙われてるの！？』

『そうみたいだね』

もしかしたら、この会場の中にミーシャをやった奴が……

ベチンッ

「いっ…!」

突然、背中に衝撃が走った。

涙目で振り返ると、そこにはチエルがいた。

「ボサツとしてたら、ダメなんじゃない？ あたし達の番もう少しでしょ？」

「だからって背中を叩かなくても」

「気にすんな」

「気にするよ」

その時、スカイは、あることを思っていた。

『“あたし”達の番もう少しでしょ？』

そうチエルは、言ったのだ。

チエルの一人称が変わっているのだ。…おかしい。

…チエル、もしかしてミーシャの出来事の他に何かあったのか？

「十代目。大丈夫っすか？」

グレイの言葉で、ハツとした。

「う、うん。大丈夫だよ。それより、チエルは？」

「もういきました」

「早っ!？」

「それでは、チーム“ピース”対チーム“御三家”の試合を開始します。第一試合の方、前へ」

「それじゃあ、あたしが行かせてもらうよ」

そう言い出したのは、チエルだった。

「気を付けろよ」

「わかってる」

そう言いながらフィールドに入って言った。

「ならば、俺が行こう」

そう言って、出てきたのは、フシギバナだった。
どうやら、チエルの相手のようだ。

「チエル選手とルミック選手、準備はいいですね？…それでは、第一試合、初め！」

あ、あのフシギバナってルミックって名前なんだ。

「それじゃあ、俺から行かせてもらうぜ！“葉っぱカッター”！」
ルミックは、無数の葉っぱカッターをとばしてきた。

「“冷凍ビーム”」

チエルの放った冷凍ビームは、葉っぱカッターにぶつかり、葉っぱカッターを固まらせた。
固まった葉っぱは、地面へと落ちた。

「アンタには、悪いけど“さっさと”終わらせてもらう」

「ほう。言ってくれんじゃねえか」

「“水狼暴”^{すいろうばく}！」

チエルがそう言うと、水でできた巨大な狼がルミックに向かって、走っていった。

「は、速いっ!？」

狼のスピードは、巨大な体のくせに速かった。

「ぐっ…！」

結局、ルミックは、回避することができず、狼によって吹き飛ばされた。

「チエル…あんな技を持ってたんスね」

「うん。でも、この技は……」

そんな会話していた時、ルミックが立ち上がった。

「……な、なんともねえ」

ルミックは、吹き飛ばされて傷ついたものの水狼暴でのダメージは、あまり見られなかった。

「見かけだk————ゲボッ!!?」

「見かけだおしか!」と言おうとしたみたいだけど、そんなこと出来なかった。

「な! あいつ水を吐き出した!？」

喋れなかった理由は、水を吐き出したためだった。

「どーなってるんスカ!？」

「“水狼暴”だ」

「!あれと関係が!」

「うん。水狼暴の狼は、ルミックが言おうとした『見かけ倒し』で、ダメージはあまりない。

けれど、あの狼にあたり、狼の一部の水でも飲んでしまうと……」

「飲んでしまうと…どうなるスカ?」

「体中の体液という体液が自在に暴れだすんだ。でも、暴れだすつて言うより、『操る』かな。チエルは今、ルミックの体中の体液を自在に操れるんだ」

「そ♪せつめーごくろーさん♪」

チエルが、こちらを向きながら言った。

「でも、だいじょーぶ♪殺しはしないよ♪ちよつと苦しんでもらうだけ」

それから、数分後にルミックは、苦しみながらも気絶し、チエルの勝利だった。

だけど、それは“チエルらしくない”勝ち方だと、スカイは思った。

「それじゃー次!スカイよろしくね♪」

「あ、うん。分かった」

そうして、スカイはフィールドに進んでいった。

スカイがフィールドに入る前に対戦相手は、もう既にいた。

「来たな。俺は、レザ。ジュカインのレザだ」

相手は、みつりんポケモンのジュカインのレザみたいだ。

「俺は、バシャーモのスカイ。宜しく」

「先手を譲るぜ」

「それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうよ」

「レザ選手とスカイ選手、準備はいいですね?…それでは、第二試合、初め!」

ドゴォン!

審判の宣言と同時に思わせるぐらいの速さで、レザがいた場所にスカイの右手がめり込んだ。

「なかなかやるな!」

「そちらこそ」

「“タネマシンガン”!」

「“火炎放射”!」

レザのタネマシンガンを火炎放射で、相殺した。

「ほう。ならば。“リーフブレード”！」

レザの腕の葉が刃みたいにして、スカイに接近し、そして斬りつけた。が……

ガッ！

「！！」

スカイは、なんとリーフブレードの刀身を蹴って防いだ。

「すごいな。だが…これならどうだ！」

レザは、もう一つの腕の葉も刃に変えた。それで、二本の刃で高速でスカイに攻撃しようとしたが、

ガッ！ガッ！

と、さっきと同じように刀身を蹴り攻撃を防いだ。

「ドンドンいかせてもらおうぞ！」

「こい！」

すると、先ほどまでの速さより倍近い速さで、スカイに襲いかかる。周りから見れば、刃が数十本にもみえるだろう。

だが、

ガッガッガッ！

と、速さが、倍近くになっても、それを“全て”蹴りで防いでいた。

「さ、流石十代目！確かあれって……」

「ザバット！それが、スカイのベーシックな格闘スタイル☆」

「確かザバットつーと、ストリートファイト路上喧嘩を源流とする足技が特徴の格闘技だよな」

「そゝスカイは、他に、柔道とか、空手とかも少しはやってるみたいだけどね。極めるとしたらザバットが一番だったと思うよ。バシヤーモの脚力は凄いから」

「お前…本当に天然か？」

「そーゆーせってー♪」

「ハア…ハア…驚いたな」

「す、少しはやるね」

スカイは、レザに比べてあまり疲れていなかった。

「それじゃあ、お終いとするか」

「うん。そうしよう」

というと、二匹は、力を蓄え始めた。

「十代目。チートだな。あの攻撃を蹴りで防ぐなんて…」

「別にチートじゃないよ。ただのフツーだよ」

「フツーか？」

「異常なのは、“風サイクロンを操る力”だけ。ザバットは、誰にだってできる。あれは、ただの努力の塊だよ」

「……どうツツコミしたらいいか分からねえよ」

「それじゃあ、やるか」

「うん。いつでも！」

「いくぞ！ “ソーラービーム”！！」

「“ブラストバーン”！！」

ブラストバーンとソーラービームが激突。砂煙が舞う。

「ど、どうなったんだ？」

そして、砂煙が晴れる。

そこには、

「十代目？」

そこには、レザが倒れていたが、スカイは倒れていなかった。

「や、やった！」

「：レザ選手戦闘不能！スカイ選手の勝ち！よってチーム“ピース”はAブロック優勝！」

「また何時か戦おう」

スカイは、レザに手を差し出した。

「ああ」

レザは、スカイの手を掴む。

こうして、Aブロックを見事突破した。

第十一話 バトル大会 Aブロック決勝戦（後書き）

疲れたぜ☆

第十二話 ゴースト（前書き）

こーしん遅れました。すいません。

第十二話 ゴースト

「次の対戦相手って誰なのかな？」

見事Aブロックを突破したスカイ一行は、控え室に戻っていた。

「次の対戦相手は、Bブロック優勝チームのチーム・ゴーストです」

「ええっ!？」

マジですか!？

そのチーム名からして……、

「幽霊だね☆」

「☆付けていうなあ!!」

俺は、がっくりと項垂れた。

「確かチーム・ゴーストと戦った奴らは、呪われるって噂が」

「嘘おっ!!」

俺は、光速と言っていいほどのスピードで、チエルの顔を見た。光速はいいすぎかな？

チエルは、ニヤッと笑っていた。コノヤロウ。

「とゆーわけで、お二人さん宜しく☆」

「ええっ！？チエルが出るんじゃないの？！」

「これもスカイの為だよ☆ありがたく思いたまえ！」

「思えねえよ！」

全然ためじゃねえ！！

またガツクリとうなだれる俺に 그레이が追い打ちをかけるようにこう言った。

「頑張らしよう！十代目！」

俺、オワタ。

「それでは、チーム“ピース”対チーム“ゴースト”の試合を開始します。第一試合の方、前へ」

それを聞いた 그레이は、いつの間にかバトルフィールドに。自信満々だなあ、ホントに。

「グレイ選手とンテン選手、準備はいいですね？…それでは、第一試合、初め！」

ンテンという奴は、柄で細身な紫色の身体にダイヤモンドのような目を持っていて、胸にはルビーのような赤い宝石が付いていて、大きく裂け、牙の生え揃った口を持つくらやみポケモンのヤミラミだ。

「名前へんてこりんだねえ♪」

横でアイスの棒を持っているチエルが言う。
言えてるけどね。

「ってか、なんでアイス持ってるの!？」

「気にしたら負けだよん♪」

さいですか。

「さっさと掛かって来いよ」

グレイが挑発する。が……、

「……………」

「……………」

「……………」

「何か言えよっ!？」

ンテンは、全然動こうとしなかった。

「……ぐう……」

「寝てんのかよっ!?!？」

ンテンは、どうも寝てたようだ。立ったまま!？

これには、観客までズッコケた。チエルは地面に突っ伏して大笑いしてた。

「こうなったら、殴って起こしてやる」

グレイが拳をゴキゴキ鳴らしながらンテンに近づく。が、いっこうに起きる気配がない。

「寝ながらくたばれ!!」

グレイが、ンテンに向かって拳を放った。

しかし、ンテンには、当たらなかった。

「は?」

つまり、空振りになったのだ。

「あいつ、何処行った!？」

グレイが、周り見渡すがンテンの姿は、見当たらない。

「アイト「…ぐう」は？」

グレイが、視点を下に下げる。
つまり足下に、ンテンがいた。
ちなみに、

「……ぐう……」

まだ寝てる。

ブチッ

何か切れる音が聞こえたぞっ？

「いい度胸してんじゃねえか」

次の瞬間、ンテンがいた地面にグレイの拳がめり込んだ。
ンテンは、グレイの拳をまた避けたのだ。
しかも、

「……ぐう……」

まだ寝てる。いつまで寝てんだよ!

「コノヤロォ!」

グレイが再び何発ものパンチを放つ。
が、ンテンはそれを全て避ける。
それも、

「……ぐう……」

まだ寝てる。なんで寝ながら避けれるの!?

「“イリュージョンフレイム”！」

すると、グレイの周りに無数の火の玉が出てきた。
俺から見れば、幽霊とかの火の玉に見えなくてもない……。

「いっけえ！」

グレイの叫びと共に、無数の火の玉がンテンに飛んでいった。
が、ンテンは、その火の玉を綺麗に避ける。
勿論、

「……ぐう……」

まだ寝て r (ry

「まだまだあ!！」

グレイがそう言うとなンテンが避けた火の玉が旋回し再びンテンに飛んできた。
が、後ろから来る火の玉を後ろに目があるように避ける。寝てるのに……。

「ドンドンいくぜえ！」

グレイの掛け声と共に、再び火の玉が襲いかかる。
が、結果は同じ。ンテンは、それを避けていく。

その時、グレイがニヤツと笑った。

「引っ掛かったなこの寝坊助ヤロー！」

グレイの叫び声と共に、ンテンのいる地面から火柱が立った。
ンテンは、火柱に直撃し、ボタンと倒れた。そして、何処から取り
出しかわからない小さな白旗をふった。あっけな！

皆さんお分かりのように、

「……ぐう……」

まだ寝てます。

「ンテン選手戦闘不能！グレイ選手の勝ち！」

「っしゅ！」

すると、観客席から歓声が上がった。なんというか、ンテンは結局、
技使わなかったな。

「それでは、第二試合の選手、前に出てきてください」

審判がそう告げた。

「スカイいってら〜♪」

「やっぱり俺がいくの？」

「とーぜん♪」

「僕も無理だし……」

「……………」

「……………」

「…………え、なに!？」

いや、ちょっと、

「レントいたんだねえWWW」

「ええっ、最初からいたよ!？」

「いや、まあ、前半いなかったけど」

「出番がなかったただだよ!」

レントが涙目になってる。ちょっと、やりすぎたかな？

おい、チエル、笑ったんな。可哀想だろ。

そんなこんなで、結局俺が出ることになった。

「スカイ選手とシブル選手、準備はいいですね？…それでは、第一試合、初め！」

シブルという相手は、深い紫色の体で、寸胴な人の形をしているシヤドーポケモンのゲンガーだった。

ゲンガーって、あまり良いイメージがないから用心しておこう。と思っていたら、

「どうも、僕、シブルといいます」

いきなり俺の元に駆け寄ってきたシブルは、手をスツと俺にさし出してきた。

……うん？

「え、あ、どうも、スカイ…です」

差し出された手をつかんだ。握手である。

「それでは、正々堂々フェアで戦いましょう！」

シブルはそう言う俺から離れて、

「さあ！いつでもどうぞ！」

と構えた。

……うん。イイ奴だね。礼儀正しいし、いや正しすぎるし。

「それじゃあ、お言葉に甘えて————」

俺は、地面を思い切り蹴り、シブルに向かって“ブレイズキック”を放った。

“まもる”

シブルは、それを防ぐとすぐに次の行動に出た。

「シャドーパンチ」！

シブルのシャドーパンチが、こちらに迫ってくる。
シャドーパンチは、回避不能。

だったら、『潰す』！

“ほのおのパンチ”！

シャドーパンチをほのおのパンチで相殺した。

「なかなか！」

「そっちこそ」

「あれ？確かゲンガーって、影の中に忍び込んだり出来るんだよね？」

「それがどったの？」

レントの言う事にチエルは首を傾げる。

「だったら、なんで影の中に入らないんだろう。その方がバトルとかで楽なのに」

レントは、絶賛バトル中な彼らを見ながら言う。

「でも、シブルくんさ。さっきこう言っただじゃん————」

『正々堂々フェアで戦いましょう！』

————ってね☆」

「言ってたけどさ。それより、何でこんなところにいるの？ラルク」
いつの間にか隣にいたラルクに突っ込む。

「話の続き話すよ」

「せめて何か言って欲しかったな」

「正々堂々フェアで戦うのに、そんなの卑怯な行為っぽいからじゃないかな」

「……なるほど、なるほど」

「“シャドーボール（連射）”！」

あー、括弧言っちゃたね。

そんなこと思っていたら、無数のシャドーボールが飛んでくる。

俺は、小さく深呼吸をし、息を整える。

「かぜはくしゅ風拍手”」

パンッ、と乾いた音が響いた。

文字通り俺が拍手をしたのである。

すると、その拍手の衝撃で台風並の豪風がふき、無数のシャドーボールの軌道を変えた。

軌道が変わったシャドーボールは、地面やらに激突するが、観客などには一切当たっていない。

それも当然のはず、俺の“サイクロン風を操る力”で軌道をずらしたから、思い通りの所に当たるのである。

その他にも、相手を吹き飛ばすとか活用法は色々なのである。

「うわあ、なんだか凄い」

シブルが、ポカンとなっていた。が、すぐに真剣な表情に戻った。

「それじゃあ、本番いきますか」

シブルがそう言うのと、両拳がバチバチ、と電気を纏った。

「オーケー」

俺は、同じく両拳に炎を纏わせた。

そして、『殴り合い』が開始された。

「つか、なんで殴り合いなんだよ!？」

レントが殴り合ってる二人を見て、ツツコンだ。

「『正々堂々フェアで戦う』 Ⅱ 『殴り合い』 って方程式でもできてんじゃないの?」

「ええっ!？」

殴り合いが終了するまで、10分掛かった。

俺のパンチが、シブルの頬にクリーンヒットし、シブルが倒れたのだ。

正直10分は、辛かった。

「僕の負けだよ。ああ、悔しいなあ、ちくしょう。でも、今度は負けないから」

「今度も負けないから」

こうして、俺達は、見事決勝戦まで行けたのだ。

「そういえば、あのンテンって奴…」

「ああ、ンテンはね、一日の睡眠時間が23時57分なんだ」

「驚きの時間っ！」

第十二話 ゴースト（後書き）

風拍手は、初期の設定から少し変えました。

スカイ「もうそろそろバトル大会編が終わるね」

まあね。あー疲れた。寝よ。

スカイ「おい（汗）」

第十三話 急展開（前書き）

長らくお待たせしました！

第十三話 急展開

決勝戦。相手は、Cブロック優勝チームの“パーヴェント”だ。

それは、俺達の想像していたものは、違うものだった。

その理由は、第一試合がまさかの不戦勝で終わってしまったからだ。

「こんな事ってあるんだね……」

「相手チームになにかあったのかな」

第一試合は、チエルが出場するはずだったが、不戦勝で終わり、第二試合は、グレイの出場となった。

「それじゃあ、ちゃちゃっと終わらせてきます！」

と、グレイは、自信満々に言っていたけれど、

「逆に心配だなあ……」

「死亡フラグっぽいもんね」

レントが、あはは…と苦笑しながら言う。

そして、第二試合の始まった。

グレイの目の前にいるのは、ベルと呼ばれたコジヨンド。ただベルの目は、虚ろな目だった。生気がまるでない。

「はぁ、やりにくいな……」

グレイは、頭をポリポリと掻きながら言った。

「なんつーか、操られてるみてーでな」

そう言いながら、グレイは構えた。

「さっさと終わらせて貰う——ぜっ!!」

グレイは、ベルに向かって駆け出した。

「“炎のパンチ”」

拳に炎を纏わせベルに向かって殴りつける。が、それはできなかった。

ヂヂヂ：

その音は、アニメなどでよくある音だった。何かの導火線に火がついたような。

グレイがそれに気がついた時は、ベルに拳をぶつけることぐらい簡単な距離だった。

「……あん？」

グレイが、その音源の方に視線を向ける。
つまり、ベルとグレイの間の足場辺りだ。

そこにあつたのは、ダイナマイトだった。

「はあっ!？」

次の瞬間、

ドオオオオオオン!!

轟音と共に爆発した。

「んなっ!？」

「芸術は爆発だ!」

「チエル、今はふざけてる場合じゃないぞ!」

爆発により出た砂埃の所為で、バトルフィールドが見えない。

「おい、どうなってんだよ!？」

「あの子、ダイナマイト持ってなかった?」

「何が起きてるの?!」

などと観客から驚きと困惑の声が聞こえてきた。
うむ。余計心配になってきたよ!

「グレイ！」

その時、砂埃の中からグレイが飛び出してきた。

飛び出してきたグレイは、一直線にレントの方に飛んでいき、直撃した。

「んがっ！」

「ぎゃふん！？」

「ぎゃふんって W W W W W」

「チエル、笑うな」

レントが可哀想だ。

「あ、頭が割れるう」

レントは、グレイが直撃した頭を涙目でさすった。

レントが無駄に可哀想なキャラになっているのは、気のせいだろうか？

「ちっす。十代目」

ちっすって何だよ、ちっすって。

と、心の中でグレイに突っ込んだ。

「って、グレイ無事だったんだ！」

「まあ、色々危なかったっすけど……」

グレイが頭を掻きながら言う。
その時だった。

「ふはは……」

砂埃の中から誰かの笑い声が聞こえたのは。

「なんだ？」

砂埃がどんどん晴れていく。

そこに立っていたのは、ベルだけだった。

しかし、ベルは、笑っていなかった。なんだか怖いんだけど！
どこから笑い声が！？

「ふはは。」

すると、ベルの影から、ずずずと腕がでてきた。ひい！ なん
のホラーだよ！？

「初めましてだな」

そいつは、ベルの影から腕と同じようにずずずと出てきた。

魔法使いを思わせる黒い衣を纏った幽霊のような姿をしていて、
頭部からは白い髪のようなものが伸びており、首の周りには赤い牙
のような突起があるポケモン——ダークライだ。
幽霊じゃなくてよかった……いや、じゃなくて。

「誰？」

「ああ、俺は、タトナスだ。まあ、お前たちのように言えば、このパーヴェントのボスだな」

「つまり、お前が頭か？」

グレイが、ものすごい殺気を放ちながら、キツと睨む。

「ああ、そうだ。だが、こいつは、関係ない」

タナトスが、ベルを尻目に言う。

「ベルそいつが関係ない…？」

「ああ。こいつは、ただの一般人だ。俺が、マインドコントロールしただけだからな」

「……………！？」

その時だ。

「な、なんだよあいつ！」

「突然出てきたぞ！？」

「意味わかんねえよ」

再び観客が騒ぎ出した。

「少しギャラリーが騒がしいな」

タナトスは、そう言うのとパチンツ、と指を鳴らした。

次の瞬間、上空から黒いエネルギー波が観客席に放たれた。

「なっ！」

観客から悲鳴が聞こえてくる。

「お前…！」

「そう怒るな。あいつらは、無事だ」

「は？」

黒いエネルギー波が放たれた観客席に視線を向ける。
そこには、

「ラルク！」

そこにいたのはラルクだった。しかし、その近くに観客の姿がない。
い。

「……へ？」

「観客は何処に？」

グレイが、辺りをキョロキョロと見渡す。

「……つか、観客が全員いないんすけど……。十代目」

「えっ……!?!」

俺も、観客席を見渡す。そこには、本当に誰もいなかった。誰ひとりとして。

「まったく、ここまでよくやってくれたよ。ホントに」

ラルクが、観客席の辺りから浮遊して、俺の隣に来た。

「観客ごと巻き込むことは、ないんじゃないかな。タトナス」

ラルクが、後頭部を掻きながら言う。

「つて、知り合いなの!?!」

「まあね、少しだけなら面識があるくらい」

「お前には、関係ないはずだ。ラルク」

タトナスから発せられた声は、先ほどよりもドスの利いた声だった。

「べっつに。カンケーはあるけどね」

「おい。ラルク」

「んあ?」

ラルクから、欠伸混じりの返事が返ってきた。

「観客は何処に行っただよ？」

「ああ、そのことね。それなら大丈夫、安全な所に“テレポート”してあげたからね。」

そして、ラルクは、俺の肩にポンツと手をおいた。

「さっ！ さっさと終わらせちゃってよ。スカイクン」

「……………は？」

何故そうなった？

「何で俺？」

「いや、元々タトナスは、君に用があったわけだし。だから、君が相手してあげてよ」

……………まあ、このままタトナス^{コイツ}を放置するわけにはいかないし。

「……………わかった。すぐに終わらせる」

その時、タトナスが、ニイと不気味な笑みを浮かべた。

「面白い。ならば、俺も、すぐに終わらせよう」

“炎の渦”」

“悪の波動”」

技を放つタイミングは、ほぼ同時で、お互いの技が相手の技を相

殺した。

「なかなかやるな。まさか、俺の技を相殺するとはな」

「そりゃあどうも」

「ああ、そうだ。それならこういうのはどうだ？」

タトナスは、指をパチンツと鳴らした。

俺は、空中をいた。

勿論、重力も正常に作用していて、地面へと落ちて行くはずだが、俺には関係ない。

「……いや、いきなり空中戦に移行って」

「そういうな。お前にとっては、十八番だろう。空中戦は」

「まあね。風を操れるから落ちることもないし」

チエル曰く「空中戦最強」らしい。

「ふはっ！ 相手に隙をみせるとはな」

しまっ————！

ゴキンツという骨が折れる音と共に右腕に激痛が走った。

第十三話 急展開（後書き）

さあ、ドンドン執筆するぞ！

ラルク「期待せずに待つときます」

第十四話 謎のサンダース（前書き）

長くなってしまった。

?????
「十四回死ね」

第十四話 謎のサンダース

「十代目がいつの間にか空中に！」

「テレポートの類だよー」

「くそっ！ 十代目！ 今、助太刀します！！」

「いや、どうやってやるの？ グレイくん」

「うるせえ！ 雌雄同体！」

「酷い！ 酷過ぎる！」

ラルクは、一瞬して泣き崩れた。
くそっ。余計にうるさくなった。

「でもさー、グレイ。今は、あっちが相手じゃないの？」

チエルが首を傾げて訊いてくる。

「あっち？」

チエルの指す方にいたのは、一匹のコジョンドーベルだ。

「あー……。完全に忘れてた」

「……………」

相変わらずの無表情＆無言。ある意味怖えよ。

「（・Д・）チッ、仕方ねえ。やったるか！」

「おい、チエル。頼むから引っ込んでくれねえか？」

ったく、仕方ねえけど。

「さっさと終わらせてやるぜ！」

俺は、ベルに向かって駆け出した。

だがそれは、失敗に終わった。

轟音と共に落ちてきた雷によって。

「なんだよ！」

すると、誰かが、ベルと俺の間に割って入ってきた。

「お前は…？」

体色は黄色で、普段は普通の毛並みをしているらしいが、帯電した体毛は針のように逆立つポケモン——サンダースである。

だが、このサンダースは、普通の四足歩行ではなく二足歩行していた。

「っつか！　なんで、二足歩行してんだよ！？」

俺がそう叫ぶと、そいつが俺の方に振り返り、フツ、と鼻で笑っ

た。

「ああ！ 今、鼻で笑っただろ！！」

「これくらい誰でもできる」

くそ、出会ってそうそうバカ扱いかよ！

「失せてろ、役立たず」

そのサンダースはそう言うのと、俺に向かって雷が落ちた。

「あぶねえな！」

「避けたか、馬鹿にしてはやるな」

「避けるだろ！ 普通！？」

「早く失せてろ」

「うがああああ！！」

「す、すごい。凄いぐらいに話が噛み合わないよ！」

いや、レント。お前も体感してみるか？ 精神的ダメージばねえぞ？

「いや、勘弁」

「つか、心の中読むなよ！」

そんなコントを続けていると、また俺に向かって、また雷が落ちた。

うおっ！ あぶねえ！ もう少しで俺が、こんがり上手に焼けちゃうぞ！？

「俺はさっさと失せろと言ったはずだぞ」

「お前、俺のこと嫌いだろ？」

「さっさと始めるぞ」

サンダースはそう言うと、ベルの方に振り向いた。

……なんつか、もう慣れた。うん。もう突っ込まねえぞ。

俺は、ベルとそのサンダースから離れた。

俺が消えた（消された）フィールドにいるのは、謎の二足歩行するサンダースと、無表情なコジョンド、ベルだけになった。

最初に動き出したのは、サンダースの方だった。地を思いつき蹴り、ベルとの距離を縮める。

「は、速え……！」

その速さは皆の予想以上だった。

「グレイより速い！」

「チエル、みなまで言うな」

ベルは、自分に急速で近づいてくるサンダースに無数のダイナマイトを投げつける。

が、サンダースにとどくことはなく、サンダースの電撃に貫かれた。

「グレイより強い！」

「だからお前、みなまで言うな」

サンダースは、ベルに向かって回し蹴りを打ち込む。

しかし、ベルは格闘タイプである。

蹴りを腕で受け、もう片方の手で、“はっけい”を放つ。

「甘いな」

サンダースは、それを避け、ベルの首筋に手刀をあてた。ベルの体が、ぐらりと揺れる。

その隙に、サンダースはベルの腹に見事な蹴りを入れた。

ベルの体は、“く”の字に曲がり、吹っ飛ばされた。

壁に衝突したベルは、そのまま動かなくなった。おそらく気を失ったんだろう。

「……………はあ」

サンダースは小さく息を吐くと、この場を去ろうとして、歩き始めた。

「あ、おいっ！ 待てよお前！」

俺がそう呼びとめると、サンダースは、その場に止まったが振り向かずにこういった。

「馬鹿と話してると時間の無駄だな」

そういうとまた歩き始める。このやろっ……！

「あっ、ちょっと待って！」

また呼びかけられ、サンダースはまた止まった。

「えっと、僕は、レントって言うんだけど。さっきはありがとう。それでさ、教えてほしいんだ、君の名前」

おい、レント。そんなことを言ったところで、さっきの言葉が返ってくるだけだぞ。

「バロック」

サンダースは、振り返らずにそう応えた。

「お前、バロックって言うのか…………？」

「名前で呼ぶな、馬鹿が」

「んなっ!？」

バロックは、そのまま去って行った。あいつウゼエ！
……しかし、あいつ何のためにここに来たんだ？

そんな俺たちは、十代目の事をすっかり忘れていた。

第十四話 謎のサンダース（後書き）

はい、新キャラのバロツクくんです。

グレイ「なんだよあの上から目線野郎は」

バロツクくんは、イヴさんから考えてくださったキャラです。
遅くなってしまってすいません、本当にすいません！

ほかに、こんなキャラを出してほしい！という方がいれば、お申し付けくださいませ。

では☆ミ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1632/>

スカイと仲間たち ～大空と謳われる者～

2011年10月7日00時37分発行